慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	杉原四郎著 J・S・ミルと現代
Sub Title	John Stuart Mill and the modern times, by Shiro Sugihara
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.4 (1980. 8) ,p.653(155)- 654(156)
JaLC DOI	10.14991/001.19800801-0155
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800801-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

杉原四郎著
『J・S・ミルと現代』

本書は，すでに名著『ミルとマルクス』以来，マルクス経済学研究，ヨーロッパ経済学のわが国への導入および日本経済学史，とりわけ，河上肇研究など，経済学史の広汎な領域にわたって多彩な活動を展開してこられた著者によるきわめて示唆的で興味深いミル研究である。はじめてミルに接する人々にもわかり易くミルの全体像を理解させようとする深い配慮とともに，従来，わが国のいずれのミル研究にも見出すことのできないきわめてユニークな側面を随所に溢れさせているということができる。一般に，J. S. ミルは古典学派経済学の最後の巨人として，スミス，マルサスおよびリカードウとの関連でふれられるのが普通であるが，著者は，こうした古典派経済学およびベンサム主義——哲学的急進主義と対立するマルクスとエンゲルスおよび彼らの史的唯物論の流れと対比することによって，思想家ミルの歴史的な役割を明らかにするとともに，彼の思想および哲学の現代的意義を追求している。その意味で，本書は小冊子ながらすぐれた啓蒙書であるとともに高度な内容をもつ研究でもあるし，『ミルとマルクス』の続編とみなすことができる。

スミス・ミル・マルクス
自由と進歩
自然と人間
労働と競争
ミルと日本
あとがき
ミル略年譜

から成っており，「あとがき」と「ミル略年譜」以外の各章は，それぞれいくつかの小項目にわかれている。著者はまず，冒頭の「スミス・ミル・マルクス」において，わが国におけるマルクス主義の父，河上肇の説，スミス——ミル——マルクスの路線からスミス——リカードウ——マルクスへの変化に対して，スミスとミル，ミルとマルクスという二つの系列を組み合わせ，思想家としてのミルを浮かび上らせている。この章で，もっとも注目されるのは，「ミルをめぐる三人の女性」であろう。周知のように，ミルの自叙伝には，父ジェームズ・ミルと彼によって息子ミルに半ば強制的に施された早教育や後に彼の妻となったハリエット・テーラーとのロマンスおよび彼女の死後，ミルの最晩年を支えたハリエットの娘ヘレンのことはよく書かれているけれども，ミルの母については何も書かれていないし，ミルの兄弟たちのこともほとんど書かれていないのに奇異の感をもつ者も少くないであろう。著者もこの点について，ミルの初期草稿を引用し，「もしも母が，イギリス人には稀な，真に温かい心をもった人であったならば，第一に父をまったくちがった人間にしていたであろうし，また第二に，子供たちを愛情のある，また人からも愛される人間に成長させていたであろう。しかし私の母は，いくら善意であっても，子供たちのためにあくせく働いてその生涯をすごすことしか知らなかった」(15頁)。

しかし筆者は，このミルの母親観はあまりにもきびしすぎはしないだろうかと考える。私はこの一節は，天才に，しばしみられる性格的な偏狭さを感ぜずにはいられない。自分の母親に，自国民に稀なほどの温い心を要求する。この文章では，何かイギリスの婦人は概して冷たい感情の持主のようにさえ思われるが，それはともかく，母親とは，まず第一に母性的で善意で子供たちのためにあくせく働いてその生涯を過す存在であると観念してきた私にとっては，このミルの言葉にはなにか割り切れぬものを感ずる。母性というものを理解することができず，ひたすら父ミルの強烈な父性に束縛されていたのではないか。自叙伝のなかで，彼の母親やその兄弟たちにほとんどふれることがないのは，これを知的なあるいは精神史的な自伝を傑作としながら，それにもかかわらず，ある種の人間臭さに欠け，ミルをあまりにも優等生的な者にしているとはいえないであろうか。

筆者は，この書物によって著者に教えられたことのひとつとして，ミルの資本主義と共産主義との比較についての意見がある。この二つの体制比較について，「ともすれば現実の資本主義と理想的な共産主義とを比較しがちであるが，それは不公平だ，なぜなら，現実の資本主義のいろいろな欠陥は私有財産制を前提としたうえでの改善策によって除去できるのだから，理想的な私有財産制または個人主義と理想的な共産主義とをくらべてみてはじめて，真の正しい評価をくだすことができるとしています」(68頁)。その意味では，現実の資本主義と現実の共産主義との対立拮抗する二十世紀後半の世界に生きるわれわれは，社会主義の本質をもっともリアルに認識できる絶好の時期に遭遇しているのかもしれない。

つぎに言論の自由および個性の尊重に関連して『自

由論』のなかでミルののべるところは興味深い。「世論という形での多数者による少数意見の抑圧がもっともおこり易い状況として，絶対的な真理として確信される場合の対立よりは，「対立する二つの意見が，一つは真理で他は虚偽であるというのではなく，両者が真理をわけもっている場合，つまりどちらも『半真理(half-truth)』である場合が一般的であって，その場合こそ一方が他の欠けた部分をおぎなうために是非とも必要なのだ」という見解である（75頁）。著者杉原氏はこれについて，「学問的真理が往々にして学問以外の権威とむすびついて絶対視され，『半真理』であることをわすれて，『ドグマ』に堕する危険性があることを知るべきではないでしょうか」と語っているのは印象的である。また個性尊重の問題について，「現在では多くの人々は，自分が本当に欲しているのは何であるかを問題にするのではなく，何が自分の地位にふさわしいか，自分より上の身分と境遇とにある人々はどんなことをしているかを問題にする」というような指摘も示唆的であるが，とりわけ，多様な個性を形成するための環境がますますおしつぶされて同化作用を促進する現状を指摘し，こうした傾向をおしすすめるものとして，(1)政治の民主的改革，(2)教育の拡張，(3)交通手段の改良，(4)商工業の発展，(5)個人に対する世論の優位の完全な確立があげられているのは，注目に値しよう。

しかしこれらは現代文明の全体にかかわる問題であり，一種の疎外論ともいうべきものであり，マルクスとヴェーバーが感じた現代社会の危機にかかわるものではないだろうか。ミルの思想や社会学のなかには，ヴェーバーの官僚制や民主主義論に共通する問題が多く秘められ，さらに疎外論の面でマルクスと密接にふれ合う側面をもっていることは明らかであるが，しかしミルの思想のなかできわめて独自な点として，著者が，「人間の進歩とは何かと」いう問題を，『経済学原理』によって紹介している点が，今日のわれわれには教訓的であろう。「自由と進歩」，「自然と人間」との関連において，経済的な停止状態（stationary state）は，人間の進歩と決して矛盾するものではなく，精神的・文化的な側面では進歩を実現するのであって，そのためには，自然の開発や人口の増大を伴う生産力の発達を抑制することが必要であるとするミルの主張を，環境汚染や公害に悩む今日のわれわれの問題として著者が説得的にのべている点に私はひきつけられる。

しかしミルの立場は，なるほど1848年，経済学原理の書かれた時期から130年もたった現在，たしかに思い当る節はあるが，当時，『共産党宣言』によって労働者の絶対的窮乏化が説かれ，フランス二月革命やドイツ三月革命が勃発した時代に，停滞的な状態が人間の進歩と矛盾しないといっても，必ずしも説得的ではなかったはずで，この生産力の問題もまたマルクスとの対立点であった。この問題について，著者は，「自然と人間」のところで，くわしい考察を行っている。

ミルについては，従来，内外ともに実に多くの研究がなされてきた。筆者も，学生時代から，河上肇，河合栄治郎，大泉行雄という方々の研究をへて，著者杉原教授の『ミルとマルクス』から多くのことを教えていただいたが，本書は，従来の研究にはみられなかった独自の観点が貫かれていることがわかる。それは何といってもマルクスとの対比を，現代的な視点からみていることであり，マルクスもたんなる経済学者ではなかったが，ミルもマルクスやヴェーバーとならんで社会学者として独自の領域を開拓した人であることであろう。

終りに，ひとつ教えていただきたいことは，19世紀前半から後半にかけてのミルとマルクスの時代は，言わば，希望と楽天主義に輝くヴィクトリア黄金時代であったが，ミルの理論は，この時期を反映して一種の楽観論に彩られている面が強調されているが（146～147頁），ダーウィンの進化論やスペンサーの思想とは，ミルはどういう関係にあったのであろうか。マルクスの業績が，自然科学におけるダーウィンに比せられるが，ミル自身は進化論をどのように考えていたのであろうか。

本書は実に読みごたえのあるすぐれたミル研究である。啓蒙的な叙述の形式をとりながら，達意の文章をもってミルの内面の奥深さが読む者の心に訴えかける。著者から寄贈されて読めはじめるうちに，精力的な御研究に敬意を表するとともに，いままで贈られながら，感想を書く機会を逸した多くの御労作のなかで，本書は，どうしても塾生に推奨しなくてはならないような衝動に駆かれ，蕪雑な紹介をさせていただいた。

「良き演奏者でなくとも良き批評者たりうる」といわれる。良き批評家たる自信は全くないが，是非一読をおすすめする。〔1980年，岩波新書版，320円〕

飯田　鼎
（経済学部教授）